

華岡青洲 宝暦 10 年-天保 6 年 (1760-1835)

江戸中期の医家で、華岡流外科の創始者。初期の全身麻酔の実施で有名。 青洲 4 代の祖尚親が、付近を拓いて平山と名付け、農業に従事するかたわら医を業とした。医学専業となったのは祖父尚政の時からである。父の直道は、大阪に出て南蛮流外科医として盛名のあった岩永藩玄に師事して外科を学び、郷里に帰って家業を継ぎ 2 代随賢と称した。華岡青洲は、宝暦 10 年 (1760) 10 月 23 日に紀州 (現・和歌山県那賀町上名手) の紀の川に面し、南方に高野山を望む静閑な地で、医家の長兄として誕生した。震(ふるう)、伯行、雲平、随賢ともいった。

天明 2 年 (1782)、23 歳で京都の吉益南涯 (吉益東洞の子) に師事して漢方 (古医方) を 3 ヶ月、次に伊良子道牛の流れをくむカスバル流外科を大和見立に一年間学んだ。傍ら多くの人と交わって儒学や各派の医学を研究した。京都遊学三年にして父の死去により、二十六歳で家業を嗣ぐ。この頃、ハイステル外科書 (長崎出島から日本に伝わって間もない時期) の中の「截乳癌図」を見て、西洋では「乳癌の摘出術」を行っていることを知った。

当時の日本では、古くから「女性の急所は乳房にあり、乳房を切ると死ぬ」という伝承があり、乳房は誰も手をつけない「手術適応外」の臓器であった。しかし、青洲は京都に遊学する前に、紀州で父直道 (2 代随賢) の下で診察の折、牛の角で乳房を突き刺され、化膿した乳房を切開排膿し、一部切除した経験をもっていた。

この頃の青洲は、まだ幼名の震と呼ばれていたが、この大変な苦痛に耐える患婦の手術を見ていて「何とか、患者の苦痛をやわらげる方法はないものか」と考えたと伝えられている。若い青洲は、そこで父の書物を読み漁っているうちに、中国の外科医華佗が麻沸散を使って全身麻酔をし、外科手術を行ったということを文献で知ったという。京都では中国の外科医・華佗の全身麻酔法を学ぼうとたが、手術の苦痛をやわらげる方法を知る先人とは出会えなかった。しかし、京都での遊学中に、ある整骨医 (現在の理学療法師が整体師) が、マンダラゲやトリカブトの抽出液を使い、その麻酔作用を利用して治療をしていることを知った。しかし、実際の治療に使えるほど 安定した薬効にはほど遠く、副作用も強い事を知った青洲には、このことがヒントとなり、紀州へ帰郷後は研究と実験を繰り返し、試行錯誤すること 20 余年を費やし、ようやく麻酔薬「通仙散」を作り上げることに成功したといわれている。青洲 46 歳の文化元年 (1804) 10 月 13 日に全身麻酔による乳癌摘出術の金字答を打ち立てた。これは、モートンらの発案になるエーテル麻酔法に 40 年ばかり先立つものであった。その後も青洲は、乳癌手術だけにとどまらず、それまでタブーとされていた外科手術、兔唇 (口唇口蓋裂)、骨折整復術、骨癌、脱痘などを、麻酔を使って手術をする先鞭をつけた。こうして青洲は、当時の医学界で一躍『紀州に麻酔手術の青洲あり』と知られるようになった。各地から患者が集まった。そして、この華岡流外科を学ぶためにほぼ全国から入門者があった。

弟子第 1 号は中川修亭だが、ほかに本間棗軒 (そうけん) (水戸)、難波抱節 (備前) らが著名である。学塾を春林軒という。漢・蘭医方を折衷した外科で、〈内外合一・活物窮理〉がモットーであった。臨床記録以外にはみずから著書を残さなかったが、門人たちによる写本が流布した。

文政 2 年 (1819) 紀州藩の小普請御医師、さらに天保 4 年 (1833) 奥医師格となる。 青洲は、麻酔手術の成功後も紀州で「春林軒」を開業していたが、末弟の良平 (鹿城・青洲の第 4 弟) も通仙散による全身麻酔術を会得し、大阪中之島で分塾「合水堂」を建て、青洲と同様に弟子をとって開業していた。青洲、鹿城の兄弟には、華岡流外科術を学ぶ門人が、前後合わせて約 1, 800 人もあったといわれている。「合水堂」は良平 (鹿城) 亡き後その子良平 (積軒) を青洲の婿準平 (南洋) が助けた。 青洲のあとは次男の修平 (鷺洲・四代随賢)、孫雲平 (厚堂・五代随賢) が継いだ。